

9月25日に行われた、第32回「少年の主張」熊本大会で優秀賞を受賞した伊藤竜太郎さん（阿蘇北中、3年）の作文を紹介します。

今年、宮崎県で発生した家畜伝染病「口蹄疫」などから学んだことを主張しています。



伊藤竜太郎さん

命をもらって生きている

阿蘇北中学校
三年 伊藤竜太郎

少し寒い夜、僕が懐中電灯を照らしていたら「ドサツ」

と、わらを敷いた地面の上に大きな何かが落ちる音がした。僕は強張っていた顔を「パー」と輝かせてそれを見た。

「おー、生まれたばい！子牛が生まれたばい！」

そう、今日は牛の出産の日だったのだ。僕は初めてそこに立ち合い少し興奮気味だった。父が今にも出てきそうな子牛の足を引っ張り、無事生まれてきたのがこの子牛だ。名は母がつけて「勝男」となった。

しかし、次の日父がある異変に気づき誰かと電話していた。だが僕は知らずに学校へ行く。

そして、帰ってくると、親牛と子牛が別の囲いの中にいることに気がついた。母から話を聞くと親牛が子牛に乳を与えないので人工で育てることになったという事だった。僕は勝男がかわいそうに仕方なかった。親からの愛情をもらえずに生きていかなければならない勝男はとても辛いと思う。だけどそのかわりに僕達が親となり育てていくという思いが胸の中に強くあった。

その日から僕は勝男に粉ミルク

クを飲ませ始めた。夏休みに入るとほとんど毎日ミルクを飲ませた。勝男は僕がミルクを持つてくると早くくれと言わんばかりに動いてまわり、「ンメエー」

と、鳴くのだ。そして、飲むときも力強く容器を引っばつてくる。こつちもそれ相応の力を腕に入れておかないといけなかったが、勝男のためなら苦ではなかった。約四ヶ月くらいミルクを飲ませ、だいぶ成長したら大人の牛と同じように牧草を食べ始める。ここからは僕の仕事はなくなりあとは父と母が主な仕事をやる。

勝男が生まれて二年がたった。勝男は立派な大人の牛となり家畜市場に出されることになっ



た。朝、僕が学校の支度をして外へ出るとトラックの後ろに勝男がいた。それを見た瞬間、僕は思った。「勝男は食肉になるのか」「勝男は殺され食べられるのか」「勝男は殺され食べられるのか」と・・・。勝男はいつものように穏やかな顔をしてトラックの上に立っていた。僕はそんな気持ちを抑えつつ、心の中で「さよなら」と一言つぶやき学校へ向かった。

ある日、テレビを見てみると、宮崎の牛から口蹄疫という病気が見つかったというニュースがあつていた。最初は何気なく見ていたニュースだったが、十km以内の牛約二十万頭を殺処分決定と聞いてとても驚いた。僕は勝男の誕生の時を思い出した。処分される二十万頭の牛達も勝男と同じように生を受け、みんなに見守られながら生まれてきたはずなのに、という思いが体中に広がった。それに気になることもある。それは、処分されたあとのことだ。ニュースでは口蹄疫は人間には感染せず、食べても人体には影響はないと言っていたのに、次に出た肉料理店では「当店では安全な肉を使用しているので安心して召し上がれます。」と店員が話していた。これを聞いて僕は激しい怒りがこみ上げてきた。この店員は正しい知識ももっていないのに、あたかも知っているように振るまっている姿は、僕に

とって衝撃的だった。「これでは二十万頭もの牛達に失礼ではないか」「牛達はどんな思いで死んでいくんだ」「殺され捨てられるのではなく、きちんと口蹄疫に関する正しい知識を知った上で、食べてもらえれば、牛も本望だと思ふ。僕は二十万頭の牛達が僕達の体の一部となりその中で生きてほしいと思つた。

口蹄疫、この病気に対抗するために僕の家では、出入口にマットを敷き、そのマットの上に消毒のための粉をまくという対策をしている。車で通るときもその上を通り少しでも外から病原体を運んでこないようにするためだ。僕も毎日その上を自転車を通り通学している。

僕は子牛を育てたこと、口蹄疫の問題から学んだことがある。それは、「僕達は命をもらって生きている」ということだ。そんなの知っていると思う人も多いだろう。しかし、この言葉の意味を考えたことがあるだろうか。僕は、考えてみて少し分かった気がする。「食物連鎖」これが全てを物語っているはずだ。三角形のピラミッドから一つの種属達が消えたとすると、それだけで僕達はこの世に生きつづけることができなくなるのだ。だから僕達は一つ一つの命を大事にしこれからは生きてゆくことが求められているのだと思う。